

異彩放つ最年少ヘッド

土曜日の運動公園に、立派な体格の男たちが50人ほど集まり、大きな方パンを地面に広げて防具をつけ始めた。この日の練習場となった兵庫県尼崎市内の補助グラウンドで、手際よくラインを引いていく。

Xリーグ西地区の「エレコム神戸ファイニーズ」の一番の悩みは週2回の練習場所の確保だ。大学のグラウンドのほか、河川敷のこともある。急造の練習場は10分もあれば出来上がる。「慣れているから、線を引くのがすごく早くなった。専用グラウンドのないチームは日本一になれないと言われるんです」。ヘッドコーチ就任2年目の米村栄一(32)は苦笑いする。

米村はXリーグ18チームの中



エレコム神戸ファイニーズ 米村栄一 32



サイドラインで指揮するエレコム神戸ファイニーズの米村さん(中央)

で最年少のヘッドコーチだ。2003年、26歳の若さで母校の龍谷大の監督に就任し、いきなり1部へ初昇格させて注目を浴びた。

選手としては大産大高2年で全国優勝しているが、異彩を放ち始めたのは大学進学後。「攻撃ライン以外、すべてのポジションを経験した」といい、主将としても企業を回って協賛金を募ったり、部の地位向上のために大学と折衝したりした。指導

者としての素地は、この時、磨かれていた。

年上の選手もいるなかで、米村が掲げるのは「仕事とアメフトの両立」。さまざまな職業の選手たちは、休日返上でアメフトに打ち込む。交通費など自己負担で、けがは仕事のリタイアに直結する場合がある。チームは、それでもグラウンドに現れる選手たちの集まりだ。米村は言う。「社会人として、入って

よかったという組織にしたい」02年にデザイン関係の会社を設立した米村は手弁当でコーチを続ける。深夜まで対戦相手进行分析し、ゲームプランを練る。「与えられた環境で力を発揮するのがクラブチームだと思う」

チームの理事長、島居浩司(44)は、米村について「データイーなことを嫌い、必ず仕事もきっちりやれと言葉を添える」と評価し、社会人アメフトについては「ぎりぎりやっていくところは共感してもらいたい」と語る。チーム運営は模索の連続だが、選手が活力を買われて、そのままスポンサーの社員になるケースも出てきている。この世界、フットボールにかける情熱だけが頼りだ。(敬称略)

エレコム神戸ファイニーズ クラブチームで、1975年に滋賀県北部で「湖北ファイニーズ」として誕生し、「サンスターファイニーズ」時代の91、93年には社会人選手権(現ジャパンXボウル)に出場した。2005年には拠点を神戸に移し、小口のスポンサーを集めるなどしてチームを運営。今年4月、パソコン周辺機器メーカーの「エレコム」(本社・大阪市)がネーミングライツ付きのメインスポンサーになった。昨季は2勝3敗で西地区3位。今季は2勝2敗(22日現在)。